学校だより第５１号

# ＴＥＡＭ 伊良林

令和７年１月２１日

【自ら考え　自ら行動し　ともによりよく生きようとする子供を育てる】　長崎市立伊良林小学校　校長　片岡 勝志

## 鬼火焚き・餅つき

１月１１日（土）は、おやじの会主催による「鬼火焚き・餅つき」がありました。子供たちは、つきたての餅を食べるだけでなく、実際に杵を持って、餅をつく体験をしました。子供たちにとって、日本の伝統文化に触れた、とてもよい機会になったように思います。お世話をしていただいた皆様、ありがとうございました。

## 青少年意見発表会

１月１９日（日）は、市民会館文化ホールで、中央公民館区青少年育成協議会主催の、第２４回青少年意見発表会がありました。本校からは、６年の代表児童が、「カラスは山へ」と題して、堂々とした素晴らしい発表をしました。

学校の登下校でカラスをよく見かける。そのカラスを追ってみると、ゴミが溢れかえったごみステーションにたどりついた。そこには、まだ使えそうな鍋や家具、おもちゃなどが捨ててあった。これらはリサイクルショップへ持っていけば買い取られ、第二の役目を果たすかもしれない。ゴミは地球温暖化を進める問題の一つである。ゴミを焼却する際に出る二酸化炭素が悪影響を与えるからだ。

2019 年、「持続可能な開発目標ＳＤＧｓ」が発表された。人類が地球で暮らし続けていくために 2030 年までに達成すべき目標である。リミットまでわずか５年だ。特に、私は１２番の「つくる責任 使う責任」に注目したい。

2019 年、イギリスが発表したデータによると、世界 194 か国で毎年排出されるごみの量はなんと約 21 億トンと、驚くべき結果だ。そこで極端ではあるが、いずれゴミになるのであればいっそ作らなければ良いのではと考えた。しかし、これは不可能だ。それなら、ゴミを循環させることができればよいのではないか。

私の家では棕櫚たわしを使っている。以前はメラミンスポンジを使っていたが、これは塗装を傷つける上、粒子が細かすぎて下水処理センターでも 100％除去されず、海に流れてしまうことを知った母が使わなくなった。棕櫚たわしは、使っていくうちに毛先が小さくなり、使えなくなると土に還る。母は、自然のものは朽ちる姿が美しいと話してくれた。

近年、地球規模で問題なのがプラスチックだ。これは明治以降、工業化が進んで新しい技術や素材ができ、人類がその良さに飛びついた結果である。今、ストローはプラスチックから紙に変

わってきている。触感や使用感はさておき、自然にとって優しい試みである。

また、家では木製のスプーンを使っている。このスプーンを使うと木の温かみが伝わってくる。木やプラスチック製以外に金属製のスーンもあるが、私は皿とこすれる時の「キーン」という音が苦手だ。木製のスプーンにはそれがないので気に入っている。日本の食器は、陶器や漆器、箸といった自然から作られ、環境に優しいものが多いことに気付いた。

私たちにとって自然のものを使うことは、まるで心の器を満たすようなものだと思う。心の器を満たしていくために、ふさわしいものを選んでいきたい。しかし、現状は人工的に作られた製品が多く出回っている。大量生産により安い値段でものが作れること、そして、安価なために買い替える罪悪感がないことが理由として考えられる。結果、ゴミが増える。だから、私は少々高価でもなるべく自然のものを使い、自然環境を守っていきたい。自然からできたものは長く生き続ける力を持っているし、やがて自然に還る。環境を守るために一人一人ができる一歩である。

カラスがゴミステーションへ帰るのではなく、いつか山へ帰る日を見たい。

身近なごみ問題について、現状に危機感を持ち、どうすれば地球環境を守ることができるのか、深い考察がなされています。自然のものをつかうことによって自然環境を守るということは、すでに日頃家庭で実践されており、とても説得力があります。「自然のものは朽ちる姿が美しい」この言葉も印象的でした。素晴らしい発表でした。ありがとうございました。